

## JMACS/SIGMUS Only Live Twice

長嶋洋一(ASL/SUAC)

はじめに

本稿執筆時点では、特別講演・平田氏の挑発的なタイトルと、これを受けた片寄氏の穏便な全体タイトルが与えられただけである。音楽情報科学研究会(音情研)の将来を熟慮した上で、本稿のタイトルを「音情研は2度死ぬ」としてみた。

SIGMUSには申し訳ないが、音情研は既に一度死んでいる。任意団体として1987年に発足した音楽情報科学研究会(JMACS)が情報処理学会の研究グループへ、さらに研究会へと「出世」するにつれて、任意団体時代の「古き良き」キャラであった音楽サイドの仲間や学会嫌い?・怪しい?仲間が去っていった。SIGMUS誕生のために必要な、これが最初の「死」であり、live twiceということはもう次に死んだら後が無いのである。

### Computer MusicとHCIとNIME

専門領域について概説してから後で好きな主張を書けという事なので、まず最初に筆者の専門だというセンサ周りの話題について紹介する。音楽情報科学Computer Musicにおいては、システムと人間とのインターフェースとしてセンサや楽器があり、システム側ではこれに対応し、認知モデルやVR等の広義のHCI (Human Computer Interaction) 技術が総動員される。楽音合成や信号処理も音情研の王道であるが、センサ・新楽器もまた重要な主役である。最近のトレンドは生体関係とユビキタス関係であろうか。この分野の世界的中心であるICMCでは広範な対象のためにインターフェースに関して登場する新報告は限られるが、2001年のACMでのCHI Workshopから始まった新しい国際会議NIME(New Interface for Musical Expression)は、ICMCの内容を包含し、さらにセッションシステムやトラッキングなどの伴奏システムや蓮根のような表情付けまでがNIMEの対象範囲である。過去から最近までのサーベイなら、NIME[1]とICMAのWorking Group "Interactive Systems and Instrument Design in Music"[2]の資料をおさえれば十分である。NIMEの論文は全てPDFでWeb公開され自分の手元で印刷製本できる。来年のNIMEは、2004年6月3日-5日に浜松の静岡文化芸術大学(SUAC)で開催予定であり、この分野に関する世界の先端が、世界最大の楽器の街・浜松に集結する予定である。ぜひとも参加されたい。[3]

### ライバル学会/研究会との関係

音情研に似た分野として、老舗の日本音響学会音楽音響研究会(MA研)、[音知研]から学会になった日本音楽知覚認知学会(音知学会)、2000年に設立された(筆者も発起人に参加)芸術科学会、等が

ある。関連分野の学会や研究会が多いと、同じ論文を少しだけ変えてあちこちで発表できるという互いに美味しい関係でもある。CHI関連では、情処学会のヒューマンインターフェース研究会や電子情報通信学会のヒューマン情報処理研究会などとの掛け持ちも多い。ところが最近、テーマがもろに音情研なのに音情研を避けて? 発表される研究が目につく。その理由の一つは「音情研は敷居が高い」ということらしい。学会の窓際で白い眼で見られた任意団体時代からの猛者の集う音情研は、音楽的な甘さなどへの追求が厳しいのが持ち味である。歴史的な議論として「音楽を判らないと堂々と言う者が音楽情報科学を研究するな」という意見と「音情研には音楽の素人でも研究できるテーマがある」というバトルは、確かに新しいメンバは引いてしまう厳しさかもしれない。しかし筆者は個人的に、この厳しさこそ音楽情報科学に対する愛情と情熱の証しであり、SIGMUSからこれを取ったら今度こそ2度目の死だと思ふ。学生時代から厳しい音情研の洗礼を受け、きちんと音楽まで学びながら研究を進めて成長してきた若手の事例を見ているだけに、これは確信を持つ。

### 最近思うこと

筆者は音情研で音楽心理学や認知科学の専門家と知り合い、ずっと憧れをもってお付き合いさせていただいていた。システムを制作する立場、作曲/公演する立場とともに、いつかは音楽心理学の深淵に挑戦しようと思いつつ約15年、ようやく最近になって入口にたどりついた。ここで驚いたのは、ある心理学実験の論文で「実験の精度は、Windows APIのマニュアルにより1msecの分解能がある(キッパリ!)」という記述であった。ITの21世紀になり、文系の人々もデータ分析だけでなく心理学実験にコンピュータを活用する時代であるが、情処関係者であれば、このような危険な誤解に対してなんとかできるのでは、と痛感した。

さて、情処学会など権威ある学会論文誌に論文を載せるには高額な別刷代がかかる。別のある学会ではきちんと査読・審査される論文誌の紙面分量に制約が無く、PDFのWeb論文誌なので投稿費用も無料、会費も安い。学会形骸化・無用論である。その一方、日々の音情研の例会に参加しては生身の発表を聞き議論に参加し大御所とお話でき先輩から苦言を浴び眼から鱗が落ち新しい出会いがあり飲み語り明かす、という体験がここまで自分を伸ばしたことを痛感している。WebやML上のバーチャルな学会や研究会などクソ食らえ、音情研の明日は毎回の研究会の場にこそある。

[1] <http://www.nime.org>

[2] <http://www.notam02.no/icma/interactivesystems/wg.html>

[3] <http://suac.net/NIME/indexj.html>